

# 寝床屋の無料配布

• 心の世と世の心  
…… 3

きえええいつ！ と一際鋭い気合の声か、空け放された道場の板の間に響き渡る。ビリビリビリ、と肌が震えるのは、声が大きいか、それとも気迫が凄まじいからか。弟子たちが銘々に打ち込みを行っていたが、気合の声で一瞬体がビクつと怯えてしまい、全員手が止まってしまふ。

木剣が体を叩く鈍い音と、だだだだだ、と板張りの道場内を走る足音。

「また、女弁慶か……」

師範代の男が、半ば呆れたように呟いた。打ち込みをさせていた弟子が気圧されたような顔で、道場内をそれこそ「暴れまわる」と表現した方が良いようなあちこちへ走り回る薙刀と木刀の打ち込み、いや、一方的に薙刀の方が相手を追いかけてまわすのを見て、呆然と立っていた。

薙刀を横した木剣が空を疾る度に、ぶおんぶおんと唸りを上げる。それを振るうのは女性だが、目が釣り上がって鬼の形相だ。相手をしている弟子の一人が、ひい、と声を上げているのは、がむしゃらに逃げて息が上がっているのもあるだろう。だが、



女の形相の凄まじさと、執拗に負いまわされる薙刀捌きに慄いているのが八割方の理由だと思われた。

あんなに逃げる先々を塞ぐように追い回されては、恐ろしさに泣くのも当たり前だ。余程の達人でなければ相手できないだろう。

そう、それがこの道場、いや、八丁堀界限で「女弁慶」と綽名される女、河野丁かわのていだった。

………。まあ、うん。いや……。剣の修行をしに来ている者が、先を読まれるような動きしかしないのもどうなんだと言われれば、返す言葉もない。至極ご尤もである。

とは言え、だ。たかが女と侮れない迫力と実力の持ち主であるのも、事実だった。悔しいことに。

「……おい、構えろ」

師範代は怯えている弟子を促す。が、すっかり闘争心をなくしてしまったらしく、木刀を握る手が震えている。

「あいつの次の標的になりたいか？」

師範代がそう耳打ちすると、はっと我を取り戻して正眼に構えた。

かの女弁慶は、あの暴れようで既に道場内では相手をするものがおらず、仕方なく暇そうな弟子を手当たり次第に捕まえて打ち込みをしているのだった。

弟子はその言葉にふるふる、と頭を振って木刀を構えなおした。

「丁さん、ご精が出ますこと」

丁が井戸端で汗を拭いていると、後ろから声が掛かった。

「ああ、丙あきさん。用事もないのに道場にいつもいつもしゃって、あなたもご精がでますね」

もろ肌脱ぎに胸元を晒布で巻いている丁は、井戸から組んだ水で手ぬぐいを濡らし、汗を拭く。

松野丙まつのあきは丁の幼馴染みだ。そして二人して八丁堀の同心の娘である。

だが、仲が良いわけではない。

むしろ、犬猿の仲、と言うべき間柄だろう。同い年で、同じく同心の一人娘として生まれた二人は、何かと比べられもし、一緒にされてもきたからだ。

「丁さんの剣術に打ち込むその集中力、毎日あれこれと追われる私には到底真似でき

ませんわ」

丙がほう、と溜め息を吐く。

この一言ですら、盛大に嫌味が込められている。剣術狂いで女らしくない。それに比べて、花嫁修行をあれこれやっている自分の方が魅力的で、女として優れているのだ、どうだ、と言いたいらしい。

「追われていると言う割には、道場に顔を出す暇はおありのようね。婿候補の品定めに来ているのだと、どなたもご存知ですよ」

丁に遠回しに嫌味を言うなんて芸当は無理だ。なので、真っ直ぐ言葉を吐くしかない。まあ、どちらにしろ嫌味なのだから、遠回しに言おうが、直接的に言おうが大して差はない。

「まあ。品定めだなんて失礼な。ただのお稽古の通り道ですよ。勘繰りすぎじゃございませんこと？」

丙の口の端がピクピクと震えて、こめかみに青筋が立っている。凶星とはハッキリ言われると腹立たしいようだ。

「丁さんの方こそ品定めなさっているんじゃないやございませんこと？ それに女の身な



ら、他のお弟子さん達が気を遣って負けてくださるのですもの。剣術の真似事も楽しいでしょうね」

おや。遠回しな嫌味を言えるほどの余裕がなくなったらしい。

「確かに師範代や高弟の方々にはまだ遠く及ばないでしょうね。ですがそこいらの弟子方で私と互角に立ち会えるものはいないと言っていていいでしょう。そう言う意味では、真似事でも手加減をしてもらっているわけでもありませんよ」

丁は噛んで含めるように言う。

正直太刀は少し不得手だが、薙刀と小太刀ならかなり使えると自負している。この道場の実力者達とも互角とは言い難いが、数合食らいついていく程にはやり合える。相手もやるからには万が一と言うこともあり得る覚悟で来ているし、丁もそれを望んでいた。

「お役目に就くわけでもないでしょうに。女が剣術など何の役にも立ちませんわ」

丙は口を閉じるつもりはないらしい。こちらとしても相手するにも少々辟易してき

た。

「お役目に就かずとも、いざと言うときに備えておく必要もあるでしょう」

じやつと手拭いを絞つて、稽古着に袖を通す。

「それにしてもこの道場も行く末が大変ですわね。女が居ては大事な息子が通うには格が足りぬと仰つて泣く泣く諦める方も多いとか」

うふふうと気持ちの悪い笑い方をしながら、丙が笑う。この女の、この笑い方だけはいただけない。

「それこそ女に叩きのめされるのがオチだと判っているからでしょう。その程度の男です」

フン、と鼻を鳴らし、使っていた手桶の水を左手の方へざつと撒く。途端にきやあつ！ と叫び声が上がった。見れば先ほど丁の右手でごちゃごちゃ言っていた丙が、丁の真後ろで立ち竦んでいた。

「丁さん、酷いわ」

泣き声を上げながら、手拭いで着物の裾を拭くが、水の跡から見ても掠るところか、届いてすらいない。左手の方に来ようとしていたのだろうが、水を本気で被る気はなかったと言うところか。

小賢しいがそれに結果が結びついていない。



「何の騒ぎだ？」

そこへちようど声をかけてきた者がいた。この道場の師範代の一人と、弟子の一人だ。彼らも汗を拭きに来たのだらう。

「あ、わたし：：っ」

丙は手拭いを握りしめて、俯く。

「丙さん：：？」

弟子の一人、立岩数馬が名を呟く。数馬も丁、丙と同一年で同じ八丁堀にある同心長屋の生まれ。幼馴染みである。

「かかってもない水でそこまで大騒ぎする方がどうかと思いますが」

「かかってもないなんてッ！ 数馬様あ」

丙は芝居がかって言うのと、頼りなげに二、三步踏み出しながら数馬の名を呼び、その胸にしなだれ掛かろうとする。

が、数馬は支えるでも駆け寄るでもなく、怯えたような顔で後ずさっていたから、

丙の目論見は脆くも崩れ去る。丙は無様によろけてあわわと空を泳ぐと、咄嗟に裾を乱しながらどすんと足を踏み出して踏みとどまった。

ふむ、お転婆からの俊敏さは失われていないらしい。頼りなげに振る舞っているが、丙は丁と同じくそこいらの箱入り娘よりもがっちりしつかりとした体つきである。なにせ幼い頃は気の弱い数馬を、棒切れ片手に突いて叩いて虐めていたのが丙なのだから、年頃になっての手のひらの返しようは不気味に映るだろう。そればかりか。

「日の本一の女剣士になる」と、叩きのめした数馬を足蹴にしながら宣ったのは、丙の方である。

後に剣術を習っているのかと問うたところ、

「父上と母上に反対されて」

とか

「それよりは嫁入りに役立つ習い事を」

などと言いつめいた言葉を言って、しどろもどろになったので、結局、剣術道場に弟子入りもしなかったのだろう。

まあ、子供の頃によくある、勢いで吐いた妄言の類である。

一方の丁は、別に誰に何を言うわけでもなく近くの道場に行き、そこに通っていた

近所の子供達を十人ばかりのして、あつさりと弟子入りしていた。

別に丙への対抗心でも何でもない。父から薙刀の手解きは受けていた。が、ある日パタリと教えてもらえなくなつたから、それなら自分で師事先を見つけようと思つただけである。両親ともに猛反対したが、丁は気にも留めずに道場通いを続けた。

道着を身につけて道場通いをする丁を見て、丙が驚いた顔をしていたっけ。

その後数年経つて、そろそろ花嫁修行だの見合いだのと周りが騒がしくなつた頃から、丙が、女らしさとか言い出して、丁に突つ掛かり始めたのだ。

とはいえ、丁も丙も数馬も数えで二十歳を過ぎた。数馬は貧乏同心の次男、丁や丙は婿養子が必要な上に、完全な嫁行き遅れと言われる年齢だ。丙が袖だろうが手のひらだろうが、返せるものは何でも返して、婿養子に来られそうな男を見繕わねばと必死なのは、この頃の常識としては仕方ないところではあつた。

「わ、わたし、失礼致しますわ！」

丙は目論見が叶わなかつたのが余程腹立たしかつたらしい。金切り声でそう言う  
と、どすどすと足音も荒く道場を出て行つた。

「なんだあ？」



師範代はきよとんと丙の後姿を見送っていた。

いつものことだ。翌日には何事もなかったようにけろりとして、丁へ嫌味を、そして数馬に不器用な秋波を送りに来るのだ。丁はさっさと頭を切り替え、数馬の方へ一歩足を踏み出す。

「数馬殿、一手お願い致します」

丁は数馬に声をかけた。

「え、あ、いや…」

言われた数馬が思わず後退りした。

数馬がこうもおどおどしているのは、やはり子供の頃に丙が小突き回したせいだろう。この道場に通っている者の多くは、同心の子供だからと言う理由が大きいだろう。武家に生まれた男子ともなると、この頃では長男以外は別の道を行くか、他の家に婿、あるいは養子に行く以外は身を立てる方法がない。

武芸に秀でるほど入れ込んでも、確実に道場の後を継げるわけでもない。剣の修行に出ても、結局は身を立てるほどまではいかず途中で野垂れ死ぬか、野盗の類に落ちるのがオチだ。良いところ、道場破りで奪った道場の看板を盾に小銭を稼ぐ程度だが、

身を立てたとは言いがたい。

だから何となく剣術に身が入らない、と言うのは気持ちとしては判る。だが、何が起るかわからないのがこの世ではないか。それに舐めていけば痛いでは済まないのが剣術だ。やるなら真剣にやらねばならない。

「何か不都合でも？」

許嫁、ではないがもうすぐ許嫁になる者同士、立ち会うのも乙ではないか。いや、ここは一つしごいてやろう、と言う思惑もあつた丁が尋ねる。

「まあ、待て待て。俺が牛若になろうよ」

師範代がするりと数馬と丁の間に入り込む。将来の夫である数馬を鍛える機会と、強い師範代との立ち合いの間で刹那心が揺れたが、すぐに師範代との立ち合いの方に軍配が上がった。やはり己を鍛えられる魅力には抗いがたい。

「師範代、お願いいたします」

丁は一礼した。ほっと数馬が大きすぎる安堵の溜め息を吐いたのは聞き逃さなかつた。

「数馬殿、鍛錬をなまけ過ぎではありませんか？」

じろりと数馬を睨むと、うっ、と呻いてバツが悪そうに丁から目を逸らした。ふう、と今度は丁が大きな溜め息を吐く。丙の秋波に未だ怯えているのだろう。幼馴染みのよしみ、いやもうすぐ許嫁となり、夫婦となる仲だ。ここは丁が慰めてやらねば。

「同心の息子がこの体たらくとは情けない。もつと鍛錬に励むことですね」  
丁の言葉に、数馬が青ざめた顔で頷いた。

「それから師範代。私を弁慶扱いするのはお止めください。彼の強者つよものには遠く及びません」

丁はそう言って道場へ向かった。

「才オ、承知承知」

その後から、師範代がやれやれと呆れ笑いでついてきた。

その後。同心長屋では数馬と丙が許嫁になったとの話で持ち切りになった。

全く、何が起るか判らないのが、この世と言うものだ。

正式な許嫁ではなかったが、河野家と立岩家の間ではかなり乗り気で話が進んでいたはずだった。少なくとも両親からはそのように聞いていた。が、蓋を開けて見れば



これだ。

舞い上がっている丙は、数馬とのあることないことを……、いや。『丙は可愛い』、『ぜひに夫婦になつてほしい』、『夫婦になれなければ死ぬ』など、数馬は一言も口にしようにもない言葉だから、ないことないこと、と言うべきだろうか。ともかく、虚言妄言の類を同心長屋中で臆面もなく吹聴していた。とは言え、ほとんどの住人が子供の頃の丙の暴れようを見ていたので、彼女の言うことを真に受けず聞き流していたのが、それすらも本人は気にならなかったらしい。

それでも白無垢を仕立てて着るのだと、娘らしくはにかんで言う様は本当に嬉しうだった。まあ、いつも通りのうふふう、と言う薄気味の悪い笑い声は止した方が良いと思うのだが。

一方。

青天の霹靂。

不可解。

それが丁の正直な思いだった。だから、数馬に問いただすことにした。

道場帰りの数馬を、通り道にある神社の茂みで待ち伏せする。そして、通りがかつ

たところを、むんずと襟首を掴み、有無を言わず境界内へ引きずり込んだ。数馬は声も上げず、しかも抵抗も出来ずにただ体を固くし、大人しく引きずられていた。

「て……、丁……さん……」

衝撃から我に返った数馬は、己を攫った相手が丁だと気付くと、驚いた顔をして更に身を縮こまらせた。丁や丙よりも数馬の方が余程「おなご」の振る舞いに近かった。

「立岩家から河野家へ婿養子に来られるとのお話だと伺っていましたが。何故松野家と？」

遠回りに。

齒に衣着せて。

そんな芸当が出来ない丁は、当然ながら単刀直入に聞いた。

どう聞いても結局そこが聞きたいのだから、正直に聞くしかない。

「え、ええと……。その……」

数馬が目を泳がせながら、言葉を探す。

「丙さんを始め、松野の家に押し切られたと言うのもあるけれど……。その……貴方は……、何と言うか……。その……」

数馬がゴニヨゴニヨと口籠る。

「ええい、はつきりなさい！」

丁は我慢できずに怒鳴った。

「じゃ、じゃあ、言わせてもらいますけど……！ 怖いんですよ、貴方！」

数馬はそう叫んで、走り去って行った。

「怖い……？ 私が……？」

丙のように虐めたわけでもないのに？

道場での打ち込みか？

まさか！

だって、道場は修行の場だ。己の技と腕を磨くための場ではないか。本来は真剣で立ち会うものだ。命のやり取りだ。稽古だって隙があれば、叩かれるのは当たり前ではないか。いや、木刀だって気を抜けば、命を失う場合だってあるのだ。

それが怖かったと？

では、あの御仁は道場に、一体何をしに行っていると言うのだ。

丁は空っ風吹く横丁で、さっぱり腑に落ちずに立ち尽くしていた。



正に、何が起こるか判らないのが、この世と言うものだ。

更にその後。

またしても何が起こるか判らない、と思わされる出来事が起きた。

なんと、数馬と丙の婚礼も取りやめになったとの報が、同心長屋を走ったのだ。姦しい噂雀たちが、ひそひそとあちらこちらで真偽の判らない話をする。曰く、

「与力の所へ婿養子に入るらしい」

「勘定方では？」

「いやいや、代官手付だと聞いた」

相手の家のことは、しかとは判らないようだ。ともあれ、婿に出る日の、数馬の晴れ晴れとした顔は、これまでの怯えて困った暗い表情をしていた男と同じとは思えないほど、凛々しい様子だった。

「何でもおしとやかで嫺やかな箱入り娘で、数馬も大層乗り気だとか」

両親と共に礼をして歩き出した数馬の後姿に被せるように、誰かがそう言った。

「松野の娘が恐ろしいと、立岩の息子が嫌がったらしい」

丁も丙も怖いから、嬬やかな娘に飛びついたのか。

門を出る前から大声で泣きじゃくっていた丙は、数馬を追うように二、三步ふらふらと進み出て、くっ、と芝居がかつた様子で袖を噛む。そして踵を返して同心長屋の門に駆け込みながら大泣きし始めた。そのわざとらしい大声には閉口したが、丙は丙で数馬を本気で好いていたのかも知れない。

まあ、そのやり方が大層マズかった。

結局、数馬の劍の腕はからきしだったと思つて、丁は溜め息を吐く。婿養子と言うことは、相手の父親の職を継ぐのである。どんな職であつても、劍の腕はあつて損するものではなかつたはずだが。あの調子では、もし町方となつてもお役目を無事に果たすことはできなかつただろう。

門の内側からこっそり見送つていた丁も長屋に帰ろうとしたところ、背後に人の氣配を感じ取つた。咄嗟にその氣配の腕を取り、そのまま体の位置を変えながら相手の腕を背中の方へ捻じり上げる。体術も嗜んでいるので、この程度は意識せずとも出来るのだ。物盗りか胡乱な輩か知らないが、この河野丁をそこいらの女子と一緒にされては困る。

「あい、つたたたた！」

ところが、悲鳴を上げたのは、長屋へ帰ったと思われていた丙だった。

「おや、丙さん」

丁は手を離す。

「おお、痛い。近寄っただけで腕を捻じり上げるとか、どれだけ野蛮なんですよ、あなた。ま、良いわ。……ちよつと、付き合いなさいよ」

掴まれていた腕をぶらぶらさせると、丙は逆に丁の腕をとった。

「お断りです」

丁は足を踏ん張る。自分とは真反対の手弱女が伴侶だと言う喜びに、小躍りしそうな勢いで数馬が婿入りしていった姿に、丁だって不思議なほどに衝撃を受けていたからだ。そこへ更に、丙の意向に突き合うなど御免被る。

「い、い、か、ら！ つ、き、あ、えつ、てえ、の！」

丙はビクとも動かない丁を、上体を逸らしながら引き摺ってでも連れて行こうとしていた。言葉遣いも乱暴なものになっている。

「嫌です」



「良いから！ 来なさいよ！」

うーん、と言いながら丙は諦めない。丁の方も諦めるつもりはない。絶対に引かぬと足を踏ん張る。

だが、丁の袖は諦めた。びり！ と存外大きな音を立てて、袖が肩の縫い目から千切れた。丙が裾を大きく乱しながら勢いよく後ろにひっくり返る。

「ちよっ…」

流石の丁も言葉がなかった。袖が千切れたのも驚いたし、それほど丙がしつこく食い下がったのも腹立たしかった。

だが、次の瞬間すべての言葉が吹っ飛んだ。なぜなら、目の前の丙が袖を握りしめたまま、大泣きし始めたからだ。うああああん、うわあああん、と小さな子供のように泣き声を上げた。数馬を見送った時の泣き声が嘘泣きだったのが判ってしまうほどの、本気の大号泣だ。

丙がこんな大泣きをしたのは、小さな子供の頃以来のことだろう。丙にとっても数馬のことが相当堪えたのだろう。ここまで堪えていたのが、崩れてしまったのかもしれない。

丁は一つ溜め息を吐くと、丙を立てせる。が、全力で泣いてる丙はぐにやぐにやと  
して自分の足で立ってくれない。

「ああ、もう。しっかり歩きなさい」

腕を肩に回し、脇を抱えるようにすると、丙は丁の首に腕をぎゅうとまわして縋り  
ついてくる。

「重たいですよ。自分で歩いてください」

丁が何を言っても、耳元で泣きわめき続けるのには閉口した。

「だからア。かじゅましゃんはア、らまされたのよお」

丙はそう言うどぐい、と茶碗を呷る。

「あの、性悪おんにやにイ！」

かわいそうにいい、と言って、今度はうわあん、と突つ伏して泣く。全く忙しい。飲  
むか、泣くか、文句を言うか、どれかにすればいいのに。

もう五回目……いや、十回は聞いただろうか？

丁も付き合いで持たされた茶碗を傾ける。丙と酒を呑むことになろうとは、全く何

が起こるか判らない。

丙は管を巻いて、酒を煽って、泣いてをもう数刻繰り返している。それに嬉々として付き合っているわけではない。帰ろうと思っていたのに、とっ捕まったのだ。

「ちよつとお！ 聞いてんのお？ あのおんにやはねえ、あつちこつちの男に媚び売りにまくつてねえ！」

丙の言う「あの性悪女」とは、勿論「大人しくて嬾やか」と称され、ウキウキしながら数馬が婿入りしていったどこぞの娘だ。その娘と丙は華道のお師匠さんが一緒だったらしい。丙は張り合うどころか、足元にも及ばないほど、向こうの方が上手だそう。

「まあ、あにやたも似たようなころ、やつれましたけろね」

丁は「女謙信」と呼ばれるほどの酒豪で、どれだけ飲んでも呂律が怪しくなるほど酔うことはない。が、今日は丁自身も数馬の急な婿入りに驚いていたことや、丙の醜態にうんざりしていたせいも、珍しく呂律が怪しくなっていた。

「しつれいな！ わらしのどこが！」

丙がムツとして文句を言う。



「どーじょーのれしたちに、からつ端から声をかけていたれしよう」

丁も言い返す。

「ながや連中が怖がった暴れん坊が、いましやら色目を使ったって、怖いられすよ」

「怖いのはあにやたれしよ。かじゅまさんがいつもびくびくしてたもの」

丙が勝ち誇ったように言う。

「それはあにやたにれすよ。らいたいねえ。ころものころにさんざんかじゅまをいじめていらのは、あにやたれすよ」

丁は忘れずに指摘する。大事なことだ。数馬を虐めていたのは丙である。丁はやっていない。むしろ、慰めていた方である。道場での立ち合いが多少苛烈だったかも知れないが、怖いとまで言われる謂れはない。丙も数馬も、全くもって失礼である。

「おのこのくせにい、とかあ。なさけないい、とかあ」

「なあっ……！」

丙の言葉に、カッとなる。

「わらしは、なぐさ……」

「あんなにしかられちゃあ、怖いれすよ」

丁の言葉を聞いていないらしく、遮ってバカにしたように言う。

「しかつてましえん！ おまえがさんざいじめるから慰めてたんれすう」

「いじめてましえん！ 遊んであげれたんれすう」

存分に酔いが回って据わった目で、互いを睨む。

と、申し合わせたように互いの顔を手で張った。

「なによ！」

「なによとは、なんです！」

酔いが醒めたみたいに、途端に呂律が真つ当になる。丙が振った手が、丁の鼻に当たる。丁が振り回した手が、丙の顎に当たる。

「あんたなんて、嫌われてたくせに！」

「お前だって嫌われてたでしょう！」

互いの指が鼻を捻じる。

「そもそもあんた、気に食わなかったのよ！」

「それはこちらの台詞ですよ」

互いに襟元を掴み上げて、至近距離で罵声を浴びせる。

「澄ました顔して剣術なんて習って！ 私へのイヤミのつもり？」

「イチイチどうでもいいことで突っかかかってきて、腹立たしいったら」

その後は、きやあだの、きいだの、罵声と金切り声を上げて、殴るの叩くの蹴るの大喧嘩を繰り広げたのだった。

ふと目が覚めると、丁と丙は互いの顔面をがっしりと掴み合って、仰向けに座敷に倒れていた。

どうやら、掴み合いの喧嘩をしたまま、寝落ちたらしい。着物も乱れ、鬚も無残に崩れて頭が変に重い。それとともに、悪酔するほどに過ぎた酒のせいで、気持ち悪かった。

まったく。この女と酔いつぶれるまで飲んだ挙句、喧嘩した上に、二日酔いにまでなるなんて。

本当に何が起こるか判らない。

そして、さらにその後。



丁の両親が、同心株を売って持参金とするより他は、娘が嫁に行く手立てはないと思ひ詰めていた、丁度その同じ頃、一人の劍客が道場破りに来た。

その頃の丁は自棄っぱちになっていて、道場破りの最初の相手を引き受けていた。女が相手になるかと舐めてかかる者が大半で、そんな相手を鬱憤でも晴らすように思い入れ打ちのめしていたのだ。だが、その時は立ち合った途端一太刀も振うことなく、丁は破れた。

その劍客と丁がさらに後に夫婦になるのだが、それはまた別の話である。そう、なにが起るのか判らないのが、この世と言うものだ。

——了

#C103

# 寝床屋の無料配布

2023/12/31 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: [nedocoya@gmail.com](mailto:nedocoya@gmail.com)

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)

ようこそお出で下さいました。  
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

今回は無料配布だからと、短くしようとしていたのですが、書いている内に、メチャクチャ長くなってしまいました（笑

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

## \* おねがいとおことわり \*

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。